

ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録にみる 18世紀フランスのレース

Eighteenth-Century French Lace in the Inventory of Marquise de Pompadour's Estate

木 下 ミルテ*
Mirute KINOSHITA

要 約 18世紀はレースの時代である。ポンパドゥール侯爵夫人は、1745年から1764年に息をひきとるまで、ルイ15世の公式愛妾として半生を宮廷で過ごし、ロココ文化を牽引した。『ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録』には、10種を超える465点のレースが記載され、用途も多様である。ブリュッセル・レースの点数が多いが、本論ではわずか7点のみ登場するアランソン・レースに焦点をあてる。ルイ14世が国策として製造を命じたフランス産レースは、特にアランソンとアルジャンタンで発展し、18世紀に最盛期を迎えた。遺産目録上、アランソン・レースの用途は部屋着や寝具など限られている。それは質の悪さを示すものではなく、多数の絵画に描かれているように、身支度中に部屋着姿で来客をもてなす、18世紀貴族の生活習慣に理由がある。ポンパドゥール侯爵夫人が私室空間でアランソン・レースを用いたのは、逆に来客に自国のレースを印象づける目的があったと結論づけられる。

キーワード：ポンパドゥール侯爵夫人、公式愛妾、遺産目録、アランソン・レース、部屋着

Abstract The 18th century was the age of lace. Marquise de Pompadour was a mistress of Louis XV for 20 years, and an icon of the Rococo style. According to the inventory of her estate, she had fifteen varieties of lace, with a total of 465 lace garments. This paper focuses on Alençon lace, only 7 pieces of which were in the inventory. Louis XIV ordered the manufacture of French lace. Lace developed particularly in Alençon and Argentan during the reign of Louis XV. According to the estate inventory, Alençon lace was used only in dressing gowns. This, however should not be interpreted to mean lace lacking in quality, rather, lace was limited to dressing gowns due to the lifestyle of 18th century aristocrats, who entertained guests in their rooms while dressing. One can conclude that the use of Alençon lace in private spaces was conversely intended, to impress visitors.

Key words : Marquise de Pompadour, Mistress, Estate inventory, Alençon lace, Housedress

1. はじめに

ポンパドゥール侯爵夫人(Jeanne-Antoinette Poisson, marquise de Pompadour 1721-1764)は、フランス国王ルイ15世(Louis XV 1710-1774 在位 1715-1774)の公式愛妾(*maîtresse déclarée*)として約20年間を宮廷で

過ごした。7年戦争(1756-1763)の際にオーストリアの女帝マリア・テレジア(Maria Teresia 1717-1780 在位 1740-1780)と同盟を結ぶなど政治的手腕をふるったほか、国内では芸術家たちへの支援を惜しまず、王立セーヴル磁器工場を設立するなど、ロココ文化の完成に貢献した。その影響力は服飾にも及び、彼女が好んだスクエアカットの襟ぐりは長い間流行した。高く結いあげた「ポンパドゥール風」の髪型や絹地に花模様を縦糸捺染した技法の「ポンパ

* 人間生活学研究科 生活環境学専攻
Graduate School of Human Life Science, Division of Living Environment

ドゥール・タフタ」など、彼女の名前は服飾史にも残されている¹⁾。

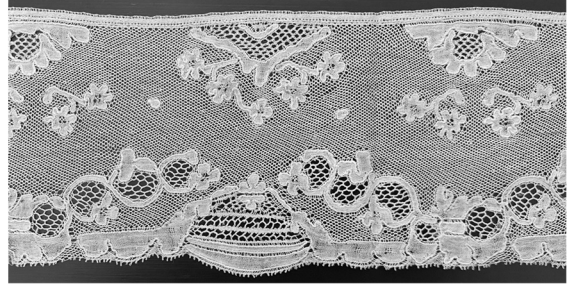
ボンパドゥール侯爵夫人がヴェルサイユ宮殿で亡くなった際に、宮殿から運び出された彼女の服飾関係の遺品は、パリにあるレイニーの館(Hôtel de la Reynie à Paris)に運ばれ、後に『ボンパドゥール侯爵夫人の遺産目録 (*Inventaire des biens de Madame de Pompadour régigé après son décès*)』(1939)に記録された²⁾。ここにはローブや被り物(*coeffure*(原文ママ))などの服飾品だけでなく、タオル(*serviette de toilette*)、寝具などが収蔵された。

本論では、遺産目録に登場する多種類のレースの中から、アランソン・レースを取り上げる。これは、ルイ 15 世の時代に最盛期を迎えたフランス・レースの1つで、宮廷内で着用された。しかし、遺産目録上の点数は少なく、用途も寝具や部屋着など私的空間のものが主である。その理由を当時の貴婦人の身支度の観点から考察する。

2. 遺産目録にみられるレース

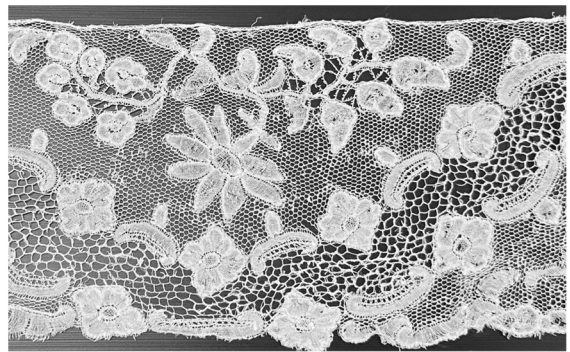
遺産目録に登場するレースを登場回数が多い順に並べると以下の通りである。

- 小さなレース(*petite dentelle*(原文ママ)) 127 点
- マリーヌ・レース(*dentelle Maline*)(Fig.1) 71 点
- アングルテール・レース(*dentelle d'Angleterre*) (Fig. 2) 65 点
- レース(*dentelle*) 49 点
- アルジャンタン・レース(*dentelle d'Argentan*) 43 点
- レスペクチューズ(*respectueuse*)³⁾ 29 点
- ヴァランシエンヌ・レース(*dentelle Valenciennes*) 20 点
- レース(*point*)⁴⁾ 18 点
- 助産婦風レース(*dentelle à sage-femme*) 10 点
- ブロンド・レース(*blonde*) 10 点
- 田舎風レース(*dentelle à la paysanne*) 9 点
- アランソン・レース(*point d'Alençon*)(Fig.3) 7 点
- ブリュッセル・レース(*dentelle point de Bruxelles* (原文ママ))(Fig.4) 4 点
- 小さな金糸レース(*petite dentelle d'or* (原文ママ)) 2 点
- 黒レース(*dentelle noir*) 1 点



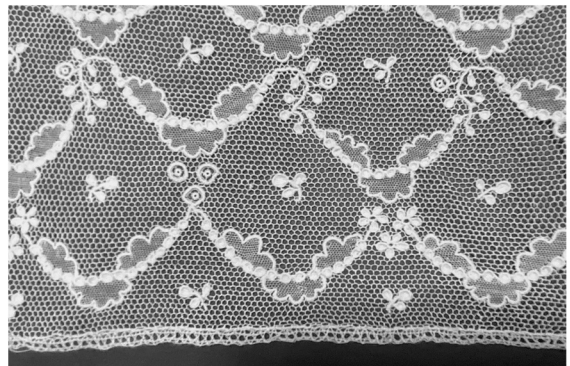
・製作者 不明
 ・題名 マリーヌ・フランドルポピンレース (部分拡大)
 ・題名 (英語) Lace of Maline & Flandre
 ・年代 1700年代後半-1800年代初頭
 ・所蔵 日本女子大学家政学部被服学科服飾美学研究室 (筆者撮影)

Fig.1 Lace of Maline & Flandre



・製作者 不明
 ・題名 ボワン・ド・アングルテール (部分拡大)
 ・題名 (英語) Lace of English
 ・年代 1700年代中頃
 ・所蔵 日本女子大学家政学部被服学科服飾美学研究室 (筆者撮影)

Fig.2 Lace of English



・製作者 不明
 ・題名 アランソン・レース (部分拡大)
 ・題名 (英語) Lace of Alençon
 ・年代 1780-1790年頃
 ・所蔵 個人 (筆者撮影)

Fig.3 Lace of Alençon



- ・ 製作者 不明
- ・ 題名 ブリュッセル・レース (部分拡大)
- ・ 題名 (英語) Lace of Bruxelles
- ・ 年代 1710-1750年
- ・ 所蔵 個人 (筆者撮影)

Fig.4 Lace of Bruxelles

アランソン・レース以外の各レースについて簡単に説明する。

マリヌ・レースはブリュッセルの北東に位置するマリヌで製造され、ポンパドゥール侯爵夫人が生きていた時代には最も美しいレースと評価されていた⁵⁾。18 世紀末に衰退したが、19 世紀になるとスペインやイタリアなどで製造が再開した。単純なデザインで、広く普及した安価なレースであったため、農民の被り物にも用いられた⁶⁾。遺産目録には肩掛け(fichu)、袖飾り(manchette)、部屋着の飾り(garniture de robe de chambre)などが登場する。

アングルテール・レースはイギリス(angleterre)の名前がついているが、17、18 世紀にイギリスに輸入されたブリュッセル・レースである。イギリスはブリュッセルに並ぶ美しいレースを製造する試みに失敗し、ブリュッセルからの輸入品にイギリスの名前をつけて流通させたことがその由来である⁷⁾。遺産目録では被り物やリボンのほか、化粧着(peignoir)、ベッドのシーツ(drap de lit)、枕カバー(taye d'oreiller(原文ママ))など幅広い用途で用いられている。

アルジャンタン・レースはアランソン・レースに酷似したニードルポイント・レースである。アランソン・レースと同様にルイ 14 世の時代に誕生し、ルイ 15 世と 16 世の時代が最盛期であった。遺産目録では部屋着(robe de chambre)、ベチコート(jupon)、首飾り(collier)などに用いられている。

ヴァランシエンヌ・レースは美しい白さが評判であった。それは他では再現不可能とされたため、1760 年代の文書では近くの村で製造された模造品と区別するために「本物のヴァランシエンヌ・レ

ス」と表記されることもあった⁸⁾。遺産目録上の点数は多くないが、特徴的なのは男性用カフス(manchette d'homme)が含まれていることである。女性のキュロット着用が珍しい中、ポンパドゥール侯爵夫人は私室でキュロットを着用したり、劇で男役を演じるなど、男性の装いをすることがあった⁹⁾。そのため、男性用カフスが遺産目録に含まれるのだろう。

ブロンド・レースは、17 世紀にパリの北部で製造が始まり、1760 年代に入ってから注目された絹糸製のボビン・レースである¹⁰⁾。コルベール(Jean-Baptiste Colbert 1619-1683)が宰相になって以来、フランスでは絹織物産業が盛んであったため比較的安価なものだった¹¹⁾。黒い絹や色絹、金属糸などが用いられ、18 世紀後半に生産が盛んになり、王妃マリー・アントワネット(Marie-Antoinette-Josèphe-Jeanne de Habsbourg-Lorraine d'Autriche 1755-1793 在位 1774-1792)も多く所持していたとみられる¹²⁾。しかしながら、長期間の保存に適していなかったためか現存するものは少ない¹³⁾。遺産目録ではカザカン(短い上着)やローブ、ベチコートなどがあり、宮廷で着用されたのだろう。

ブリュッセル・レースはフランドルで誕生した。変色しやすく、茶色がかった色調を隠すために鉛白を用いたので職人に健康被害が出た。17 世紀末から評判が高く、様々な編み方が可能であったため、室内装飾に用いられた¹⁴⁾。王侯貴族に好まれ、例えば、オーストリアの女帝マリア・テレジアは全身にこのレースをまとった肖像画を 2 度ほど描かせている¹⁵⁾ほか、画家ゾファニー(Johan Zoffany 1733-1810)の《2 人の皇太子といるシャーロット女王》(Queen Charlotte with her 2 eldest sons 1764)では、ブリュッセル・レースとリボンで飾られた化粧台が確認できる。

レース(point と dentelle)、田舎風レース、助産婦風レースについては詳細が不明である。遺産目録には「田舎風の被り物」の記述がみられることから、「田舎風」¹⁶⁾と称される装飾があったことがうかがえる。助産婦風レースはすべて袖飾りに用いられている¹⁷⁾。当時の助産婦は社会的地位のある職業であり、彼女たちがレースのついた服飾を身につけている様子が版画に描かれていることもある。そのため、あるスタイルの名前となったのかもしれない。

3. レース産業について

17世紀、レース産業の中心はフランドル地方やヴェネツィアで、フランス貴族はそこから大量のレースを輸入していた。多額の費用を顧みず、貴族たちは自分の威信を示すために高級レースを購入したため、ヴェネツィア産のレースの需要は衰えなかった¹⁸⁾。重商主義政策を推し進めた宰相コルベールは、国内のレース産業を保護し、また輸入レースにひけをとらない質の高いフランス産レースの製造を目指し、王立レース工場を設立した。イタリアから連れてきた職人にその技術を伝授させ、また画家や王のデザイナーの協力も得て、フランスのレースはわずか10年ほどで大きく発展した。

レースの種類は、クッションの上に置いた図案に沿って、糸を巻いたボビンを使って編むボビン・レースと、羊皮紙に描かれた図案の上から針で糸を刺した後、羊皮紙を取り除くニードルポイント・レースの2つに分けられ、前者は夏用、後者は冬用のレースとされた¹⁹⁾。一般的に、ニードルポイント・レースの方が高価であった。18世紀になるとアルジャンタンやアランソンで、フランスのニードルポイント・レースが誕生した。

18世紀を通して、レースは鮮やかな色のドレスのアクセントとして好まれた。女性の服飾では、帽子のたれ飾り、首飾り、スカートの裾飾りなどに用いられている。特にアンガジャント(engageante)²⁰⁾と呼ばれる袖口の段飾りのレースには、財産が許す限りの最高級のレースが用いられた²¹⁾。男性の服飾においては、カフス、襟飾り、クラヴァットなどにレースが見られる。18世紀前半には、レースは下着には用いられなかったが、18世紀後半になると下着の装飾としてもレースが用いられた。

18世紀末のフランス革命はレース産業に大きな打撃を与えた。富の象徴であるレースはすなわち貴族階級の象徴であり、革命勢力の標的にされた。レースの主な顧客である貴族とレース職人が処刑され、また国外への亡命を余儀なくされた²²⁾。こうしてフランス国内のレース産業は衰退したが、その技術は国外に逃亡した職人達によってフランドル地方などで引き継がれることとなる。

4. アランソン・レースについて

アランソンはフランス西部のオルヌ県の町である。

ヴェルサイユからは、西方約170kmに位置する。17世紀後半にルイ14世の王令で建設された約20のレース工場の中でも、近郊のアルジャンタンとともに本部が置かれたため、製造が盛んになり、独自のレースも発展した²³⁾。アランソン・レースはフランスで製造された最も緻密なニードルポイント・レース²⁴⁾で、薄いメッシュ地に優雅な花模様の輪郭が縁取りされた浮彫り調が特徴である²⁵⁾。これは、製造が困難なアルジャンタン・レースをよりシンプルに改良したもので²⁶⁾、距離の近かった2都市の職人が互いの工場を行き来していたため、模様が酷似している。

アランソン・レースは、ルイ14世により冬の宮廷での着用を義務づけられた²⁷⁾。ルイ15世の時代にも引き続き繁栄を誇ったが、他のレースと同様にフランス革命時に衰退し、革命前には約80の製造業社で6000~7000人いた職人も、1800年には業者は24にまで減り、1830年時点での職人の数はわずか200~300人である。その後、19世紀にアランソン・レースは復活し、1851年のロンドン万国博覧会で高い評価を得たほか、2010年にはユネスコ無形文化遺産に登録された²⁸⁾。

アランソン・レースは服飾以外にも寝具や浴槽の覆い、教会の祭壇を飾るなど、あらゆる用途で用いられた。また、国王が褒美として寵臣にひだ飾り(ruffle)やクラヴァットなどを与えることもあった²⁹⁾。ポンパドゥール侯爵夫人の時代にアランソン・レースは最盛期を迎えているが、その遺産目録にはわずか7点しか登場しない。内訳は足掛け布団(couvrepied)、ガウン(manteau de lit)、枕カバー、飾り布(parment)が1点ずつと化粧着3点である³⁰⁾。飾り布がどのようなものか不明だが、私的空間で用いる寝具や部屋着が中心で、ドレスや被り物などの例はない。

5. アランソン・レースに関する仮説

1745年から1764年まで王妃のように宮廷に君臨したポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録に、なぜ最盛期を迎えた国産のアランソン・レースの記録が数少ないのだろうか。さらに不可解なのは、そのアランソン・レースの用途が、ドレス、アンガジャントや髪飾りなどには用いられていないことである。その理由について4つの仮説を立てた。

1つめは、生前は所持していたが、亡くなる前に他人に譲った可能性だ。ポンパドゥール侯爵夫人の

遺書にも、女中たちにドレスやレースを譲ることが明記されている³¹⁾。

2 つめはアランソン・レースが調度品や寝具などの装飾に適していた可能性である。しかし、国王が宮廷での着用を義務付けていたことからこの可能性は低いだらう。

3 つめは、国産のレースであるため、外国から輸入される高価なレースに比べ、日用品に加工しやすいものであった可能性だ。しかし、高価であることに変わりはないので、日用品にのみ用いられていたとは考えにくい。

最後はポンパドゥール侯爵夫人の寝室は人が訪ねる場所であったため、人の目に触れることを想定してアランソン・レースが用いられた可能性である。次章で詳しく述べるが、現代とは違い、18 世紀の貴族の寝室は社交の場という意味合いが強かった。だとすれば、人目に触れさせるために、寝具や部屋着をアランソン・レースで装飾したと言えるだろう。それは彼女の財力およびルイ 15 世への忠誠心を示し、また、訪問客に対するフランス産レースのアピールを狙ったものだったとも考えられる。

6. 身支度の時間

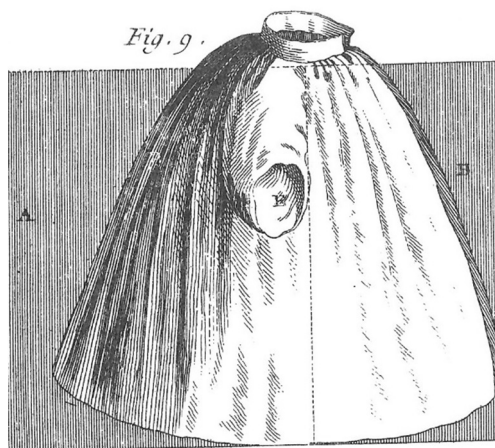
ゴンクール兄弟 (Edmond Goncourt 1822-1896 Jules Alfred Huot de Goncourt 1830-1870) が述べているように、18 世紀は普段着や部屋着の魅力が注目された時代³²⁾であり、部屋着が公的な場で着用されることもあった。部屋着姿の女性はドレス姿よりも魅力的だと、ルソー (Jean-Jeaques Rousseau 1712-1778) は『告白』の中で述べている。この時代の部屋着とは貴族が身支度の際に私室(boudoir)で着用するものを指す。遺産目録には化粧着、ペニコワール部 屋 着、ロウ・ド・シャンブルガウンの記載がある。18 世紀の女性は、高位の女性であればあるほど朝の身繕いに多くの時間をかけるものであり、その際にまだコルセットなどを付けていない状態で、化粧着を着用した³³⁾。本来かなり親密な相手にしか見せない姿である。身支度の時間に客人を招き入れるのは身分の高い人々に固有の慣習であり、ジャンリス夫人(Madame de Genlis 1746-1830)によると、公の場で部屋着を身に着けるのは王妃や宮廷の貴婦人など高位の女性にのみ認められていた³⁴⁾。彼らは使用人や自分よりも下位の人に裸や着替え中の姿をみられても羞恥を感じず、ボローニュ(Jean-Claude Bologne 1965-)によれば、

18 世紀までは上流階級の女性が入浴しながら来客の対応をしても非礼にはあたらなかった³⁵⁾。

身支度の時間を訪問したのは、貴族、聖職者、主治医やお抱えの商人などであり、その様子は絵画や版画に描かれている。画家ランクレ(Nicolas Lancret 1690-1743)の《午前》(Le matin 1739)やトロワ(Jean François de Troy 1679-1758)の《舞踏会のための身支度》(La toilette pour le Bal 1735)には、着替え中の女性が男性をもてなす姿が確認できる。

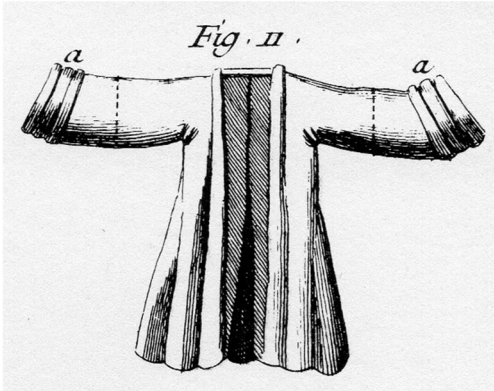
ブーシェ(François Boucher 1703-1770)の《身支度をするポンパドゥール侯爵夫人》(Madame de Pompadour à sa toilette 1758)の肖像画は、化粧着姿である。

化粧着は髪を整える際にドレスが汚れないように上から羽織ったガウン³⁶⁾ (Fig.5) で、残された図像資料からゆったりとした形状であったことがわかる。袖の有無は様々だが、首の前でリボンを結んで着用した。遺産目録には 10 着の化粧着が確認できる。3 着は刺繍がされたモスリン地で、その他のものの素材は不明だが、うち3 着はアランソン・レース、4 着はアングルテール・レースで飾られている³⁷⁾。一方、遺産目録上のガウンは、マント・ドリ百科全書の図からよりしっくりしたものであったと推測される³⁸⁾ (Fig.6)。



- ・ 製作者 不明
- ・ 題名 バゴダ風の化粧着
- ・ 題名 (英語) Peignoir with flounced hem
- ・ 年代 不明
- ・ 出典 *Encyclopédie, Compact Edition, Recueil de planche, sur les sciences, les arts libéraux, et les arts mécaniques, avec leur explication.* Volume IV, Pergamon Press, Paris, 1762

Fig.5 Peignoir with flounced hem



- ・製作者 不明
- ・題名 バゴダ風の袖がついたマント・ド・リ
- ・題名(英語) Gown with flounced sleeves
- ・年代 不明
- ・出典 *Encyclopédie, Compact Edition, Recueil de planche, sur les science, les arts libéraux, et les arts mécaniques, avec leur explication.* Volume IV, Pergamon Press, Paris, 1762

Fig.6 Gown with flounced sleeves

7. ポンパドゥール侯爵夫人の肖像画にみられるレース

次に肖像画についてみていきたい。本論では数多くのポンパドゥール侯爵夫人の肖像画の中から、ドルーエ(François-Hubert Drouais 1727-1775)の《マフをつけたポンパドゥール侯爵夫人》(Madame de Pompadour en manchon 1763)と《刺繍枠のポンパドゥール侯爵夫人》(Madame de Pompadour à son métier à broder 1763)と、ブーシェの《ポンパドゥール侯爵夫人》(Madame de Pompadour 1756)と《身支度をするポンパドゥール侯爵夫人》の4点を取りあげる。

《マフをつけたポンパドゥール侯爵夫人》では、被り物、胸元、袖飾りにレースが見られ、六角形のネット地と縁取りがある花模様から、アランソン・レースまたはアルジャンタン・レースだと考えられる。アルジャンタン・レースであるならば、遺産目録上の3段の袖飾りや4点の被り物と同一のものかもしれない³⁹⁾。

《刺繍枠のポンパドゥール侯爵夫人》のスカートの裾のレースにも六角形のネット地と縁取られた大きな花模様が見え、これもまたアランソン・レースかアルジャンタン・レースであろう。遺産目録に1点のみ記載された裾飾り(volant)はアルジャンタンとアングルテール・レースの両方が用いられている⁴⁰⁾ため、この肖像画に描かれたのは、遺産目録

に記載がない裾飾りである。

ブーシェの《ポンパドゥール侯爵夫人》には、3段のレースの袖飾りが描かれている。遺産目録にはブリュッセル・レース、アングルテール・レース、マリヌ・レース、ヴァランシエンヌ・レース、アルジャンタン・レースの3段のアンガジャントが記載されているため、アルジャンタン・レースの可能性は高い。同じくブーシェの《身支度をするポンパドゥール侯爵夫人》では2段の袖飾りが描かれているが、遺産目録上、2段の袖飾りはマリヌ・レースのものしか確認できない⁴¹⁾。しかし、六角形のネット地とレースの縁のステッチの特徴はアルジャンタン・レースのものである。

肖像画に描かれたレースの種類を特定するのは困難だが、アルジャンタン・レースあるいはアランソン・レースとみられるものが数点確認でき、ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録に記載のないアランソン・レースを所持していたと考えられる。

8. 結論

ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録上に記載されたレースにはフランス・レースも含まれているが、国外、特にブリュッセルのレースが多い。ルイ14世のもとで重商主義政策を推し進めた宰相コルベールにより、レースの輸入に規制がかけられ、国産のレースの製造に力が入れた。特に、ルイ14世の王令により王立レース工場が建てられたアランソンで生産されたアランソン・レースは、瞬く間に生産数をのばした注目すべきレースである。宮廷での着用が義務付けられたことから、そのことがうかがえる。

しかしながら、ポンパドゥール侯爵夫人の遺産目録には、アランソン・レースはわずか7点しか登場せず、用途は主に部屋着や寝具など私的空間の服飾に限られている。18世紀の貴婦人の私室における「身支度の時間」は来客を招き入れる社交の場でもあり、その際の装いは人目を意識したものであった。衣服やアクセサリーおよび調度品は、自らの地位や財力を来客に示す重要なアイテムでもあった。また、私室における装いは宮廷規範などの制約には縛られず、時には下着姿であったり、インド更紗やトルコ風衣装といった異国情味を取り入れるなど、個性を自由に表現できるものであった。ポンパドゥール侯爵夫人は、部屋着をアランソン・レースで飾ること

で、フランス産のレースの美しさを効果的に演出し、フランスを代表して国産レースの宣伝を担ったのではないだろうか。

遺産目録のレースのコレクションからは、18 世紀のヨーロッパ貴族社会におけるレースの流行やレース産業を推進した当時のフランスの国策などが、浮かび上がってくる。また、この時代に急成長を遂げたアランソン・レースの用途が私的空間に限定されているのは、その質の悪さや、ボンパドゥール侯爵夫人の趣味に合わなかったことを意味するものではない。この時代には、客をもてなしながらゆっくりと身支度をする時間こそ貴族らしさの象徴であり、また、宮廷服とは異なり、私室での装いは自由な自己表現が可能であった。独創的で、芸術に関する優れた審美眼を持ち、ロココ文化を先導したボンパドゥール侯爵夫人であれば、必ずや身支度の際の服飾に趣向を凝らしたであろう。つまり、私的空間で用いているからこそ、アランソン・レースは彼女にとって特別なものであったと考えられる。

追記

本論は 2021 年繊維学会年次大会（2021 年 6 月 9 日）で口頭発表した内容に加筆、修正を行ったものである。

引用文献

- 1) ブランシュ・ペイン, 古賀敬子訳, 『ファッションの歴史－西洋中世から 19 世紀まで』, 八坂書房, 341-344 (2006)
- 2) Jean Cordéy, *Inventaire des biens de Madame de Pompadour régigè après son décès*, Francisque Le François Libraire, Paris, 74-82 (1939)
- 3) これは、「レースの名前あるいは恐らく、このレースがついた被り物や衣服などの服飾品のことである」(筆者訳)(Jean Cordéy, *ibid.*, 77)。
- 4) 遺産目録では、刺繍を意味する *brodée* が登場したため、本論では *point* をレースと判断する。
- 5) アン・クラーツ, 深井晃子訳, 『レース 歴史とデザイン』, 平凡社, 132 (1989)
- 6) アン・クラーツ, 同書, 92
- 7) 石山彰, 『日英仏独対照語付 服飾辞典』, ダヴィッド社, 839 (1972)
- 8) アン・クラーツ, 前掲書, 92。また、『ボンパドゥール侯爵夫人の遺産目録』にはそうした表記はみられない。
- 9) 林精子, 《カフェを飲むスルタンヌ》におけるボンパドゥール侯爵夫人のトルコ風衣装』, 『Costume and Textile 服飾文化学会誌』, vol.8, No.1, 29, 32 (2007)
- 10) アン・クラーツ, 前掲書, 95
- 11) 角田奈歩, 「実物資料と現存技術に基づく 17～19 世紀西ヨーロッパのレース製造業史研究の試み」, 『経営論集』, 95, 168 (2020.3)
- 12) 角田奈歩, 前掲書, 168
- 13) アン・クラーツ, 前掲書, 95
- 14) アン・クラーツ, 前掲書, 90
- 15) 吉野真理, 『アンティーク・レース —16 世紀～18 世紀 富と権力の象徴』, 里文出版, 52 (2007)
- 16) Jean Cordéy, *op.cit.*, 80, 1131 番
- 17) Jean Cordéy, *ibid.*, 78, 1115 番
- 18) 内村理奈, 『モードの身体史 —近世フランスの服飾にみられる清潔・ふるまい・逸脱の文化—』, 悠書館, 74-76 (2013)
- 19) 市川圭子, 『アンティークレース 16 世紀から 20 世紀の美しく繊細な手仕事』, 河出書房新社, 163 (2020)
- 20) 遺産目録には登場しない。数段に重ねた袖飾りとして、「3 段の袖飾りの対(*une paire de manchette à trois rangs*)」などの表記が登場する。
- 21) ブランシュ・ペイン, 前掲書, 344-345
- 22) Le Musée des beau-arts et de la dentelle d'Alençon, *La dentelle de point d'Alençon*, La petite boîte, Rouen, 14 (2014)
- 23) 京都国立近代美術館, 『ブリュッセル王立美術歴史博物館所蔵 ヨーロッパのレース展』, 日本写真印刷, 10-11 (1987)
- 24) F.Nevill Jackson, *A history of hand-made lac. Dealing with the origin of lace, The growth of the great lace centres, The made of manufacture, The methods of distinguishing and the care of various kinds of lace*, L.Upcott Gill, London, 107 (1900)
- 25) 石山彰, 前掲書, 839
- 26) 吉野真理, 前掲書, 54
- 27) Le Musée des beau-arts et de la dentelle d'Alençon, *op.cit.*9
- 28) Le Musée des beau-arts et de la dentelle d'Alençon, *ibid.*, 9, 17
- 29) F.Nevill Jackson, *op.cit.*, 108

- 30) Jean Cordéy, *op.cit.*, 79 (1125-1128 番), 82 (1144 番)
- 31) Je donne aussi à mes domestiques tout ce qui se trouve dans mon garde-robe: vestes, jupons, jupes et dentelles. (Madame de Pompadour(閲覧日 2021/9/23 3:29))
- 32) エドモン・ド・ゴンクール, ジュール・ド・ゴンクール, 『ゴンクール兄弟の見た 18 世紀の女性』, 平凡社, 313 (1994)
- 33) 内村理奈, 『マリー・アントワネットの衣裳部屋』, 平凡社, 222 (2019)
- 34) Madame de Genlis, *De l'esprit des étiquettes de l'ancienne cour et des usages du mode de ce temps*, (1885), *Mercure de France*, 34 (1996)
- 35) ジャン=クロード・ボローニュ, 大矢タカヤス 訳, 『羞恥の歴史 人はなぜ性器を隠すか』, 筑摩書房, 40-44 (1994)
- 36) *Dictionnaire de l'Académie Française*, 335 (1762)
- 37) Jean Cordéy, *op.cit.*, 79 (1128 番), 81 (1139 番)
- 38) *Encyclopédie, Compact Edition, Recueil de planche, sur les science, les arts libéraux, et les arts mécaniques, avec leur explication*. Volume IV, Pergamon Press, Paris, (1762)
- 39) Jean Cordéy, *op.cit.*, 77-79 (1108-1110 番), 79 (1129 番)
- 40) Jean Cordéy, *ibid.*, 79 (1122 番)
- 41) Jean Cordéy, *ibid.*, 78 (1116 番)
- (指導教員：家政学研究科被服学専攻
内村理奈教授)